

令和3年度 三重大学教育学部附属中学校 学校関係者評価

				本年度の活動	具体的な手立て	達成状況(中間報告)	成果と課題	学校関係者評価	今後の改善点
教育研究	公開研究会			メインテーマ 「社会の変化に対応できる生徒の育成」 (前次研究からの継続テーマ) ・大学の先生方に本校の研究についての指導助言を仰ぎながら、研究を深めていく。 ・学期に1回、大学の先生方を招聘した授業研究会を行う。	・全体研究会で現状や課題を出し合い、各教科等の授業の充実を図る。 ・各教科等の学習とSTEP（SDGsを取り上げた探究学習）の学習の往還が図れるように授業研究を進める。 ・文部科学省、三重県教育委員会等教育行政の動向を見据えて、汎用性のある研究をめざす。 ・コロナ禍の状況のもとで、参加していただきやすい公開の方法を工夫する。	・7月および11月に校内授業研究を実施し、大学の先生方に本校の研究についての指導助言をいただき、教科研究を深めている。 ・7月に1日STEPを実施、その成果を10月末の文化祭当日に発表を行い、探求力向上を図った。 ・12月にSTEP1期を始動、2月に半日STEP、3月に中間発表会を実施したいと考えている。 ・今後も国・県教育施策を見据えながら汎用性のある研究となるよう研究を進めていく。	【成果】 ・前次研究の研究紀要内容を共有し、教科研究授業を行い、大学の先生方等から指導・助言をいただいた。 【課題】 ・積極的な情報発信、広報活動を今後も行っていく。 ・カリキュラム・マネジメントを推進し、各教科間や各教科等と総合的な学習の時間での探求学習（STEP）との往還を深めていく。	・教育課程改善の提起ができるかどうか。 ・公開研究会の実態はわからないが、研究テーマに基づくSDGsなど社会の変化に対応する力を養っていると思われる。 ・コロナ禍により、研究発表会等、計画通りには行かなかったと思うが、大学との連携のもとで研究を進められたことは評価できる。 ・コロナ禍の中で公開研究会を実施し、また実施予定であることは評価できる。昨年度、研究紀要をWeb上で公開することの検討が求められていたが、検討はなされたのか。 ・大学との連携強化は今後も高めていく必要があると思われる。 ・他の学校の指導力向上の参考になっているかどうか。	【成果】 ・計3回の授業研究会を実施することができた。その中で、実験的に「国・数・音」の3つの教科でオンラインでの研究会・事後検討会の開催をすることもできた。 【課題】 ・カリキュラム・マネジメントを推進し、各教科間や各教科等と総合的な学習の時間での探求学習（STEP）との往還を深める必要がある。
				・STEPでの学びが各教科に生きるために、各教科等の授業の一層の充実を図る。 ・生徒に育成したい資質・能力について、共通理解を図りながら研究を深めていく。 ・大学の先生方に各教科等の授業についての指導助言を仰ぎ、授業力の向上を図る。 ・先行研究の調査研究を行う。 ・大学との様々な連携活動を進め、研究を深める。	・各教科で教科部会を定期的に行い、授業記録やデータをもとに事実に基づいた研究を進める。 ・文部科学省、三重県教育委員会等の開催する研修会や他附属の公開研究会に積極的に参加する。 ・学部と附属学校教員による連携授業や、大学生の授業アシスタントを活かして授業改善を行う。 ・大学の講座の一環として、大学生の授業参観を積極的に受け入れる。	・引き続き、教室が密にならないよう配慮しながら、各教科の授業研究会を行っている。授業者は、指導案を作成し、資質・能力、STEPとの関わり等の視点から授業を計画、実践し、事後協議会で子どもの姿から授業について振り返りを行っている。 ・徐々にではあるが、家庭科や英語科で大学生の授業参観を受け入れている。今後は大学の先生に教科の授業をしていただく（2年国語科実施済）等の連携も図っていく。	【成果】 ・各教科等とSTEPで共通した内容の「まなびスケール」を活用することで、資質・能力の汎用性を確かめることができた。 ・子どもが「まなびスケール」を活用して、自ら伸ばしたい資質・能力を意識して学習に取り組む実践を提案できた。 ・各教科間のつながり、各教科等とSTEPのつながりを意識した授業実践が、前次研究と比較してより活発に行われるようになった。 【課題】 ・子どもに育成したい資質・能力が、各教科等とSTEPとを往還しながらより高いものになったかどうかの分析、検証が十分にできていない。 ・現在の状況下で、STEPでの探求学習について計画したことを発表（公開）する機会をほとんど設けることができなかった。	・SDGs、STEPなど、生徒自身が考え、時代の流れなども踏まえて、今の時代を生きるための力を養っているように思われる。STEPの探究学習について発表することさらに高まると思われるため発表の場を確保されたい。 ・各教科等とSTEPで共通の「まなびスケール」を活用し、生徒や教員双方が授業を通して実践力や学びを更に向上させてもらいたい。 ・生徒は学力を向上させることができたか。 ・生徒は勉強の仕方を工夫するようになったか。 ・大学教員による授業は、附属学校ならではの取り組みであり、強みである。生徒や教員にとってよい効果が期待できるので、積極的に進めていただきたい。 ・「まなびスケール」は有効なツールのようだが、今後の活用を期待する。また、大学生の授業参観は、教師や生徒にとっても良い刺激となるのではないかな。	【成果】 ・新型コロナウイルスの影響により予定の中止・変更が多くなされたが、ICTを最大限活用することで研究を進めることができた。 ・各教科間のつながり、各教科等とSTEPのつながりを意識した授業実践が、前次研究と比較してより活発に行われるようになった。 【課題】 ・子どもに育成したい資質・能力が、各教科等とSTEPとを往還しながらより高いものになったかどうかの分析・検証が十分にできていない。 ・STEPで計画したことを発表（公開）する機会をほとんど設けることができなかった。
	日々の研究								
学習指導	少人数指導			・1・2年生英語科及び1・2年生数学科で少人数指導を実施する。 ・少人数指導の効果について検証し、指導方法の工夫改善を図る。	・習熟度を高めるために、タブレット端末（iPad）を効果的に活用して、個に応じた指導を進める。 ・数学科は、TTでの指導であるが、T1、T2の役割分担を固定せず、また時には生徒の立場で発言するなどにより授業を活性化させ、生徒の理解及び思考の深まりをめざす。 ・英語科は、指導内容によって、1クラス36人を2分割しての少人数指導や、TTで指導する等、柔軟に使い分けてより効果的な方法で指導を行う。	＜英語科＞ ・1、2年ではTTによる授業を行っており、ペアやグループでの学習を多く取り入れ、積極的に英語を話す機会を増やしている。 ＜数学科＞ ・1、2年でTTによる授業を行っている。T1、T2の役割を柔軟に変えて授業を進めることで、生徒の対話が促進され、理解や思考の深まりが見られている。	＜英語科＞ 【成果】 ・生徒は、ペアやグループ学習の中で互いに質問がしやすく、一人ずつの発表の機会が多くあるため、英語を積極的に使う姿が見られた。 ・生徒個々の理解度やつまづきを把握して的確な指導を行うことができた。 ・1人1台タブレット端末の整備により、以前よりも生徒一人ひとりのコミュニケーションの場面が増えた。 【課題】 ・生徒個々の理解やつまづきを、より把握していく必要がある。 ・生徒どうしの交流を観察しながら、理解できない生徒への手立てを工夫する必要がある。 ＜数学科＞ 【成果】 ・2人の指導者のかけあいを見て、生徒が疑問を持ったり、自分で考えたり、仲間と話し合うなど主体的な姿が多く見られるようになり授業が活性化した。また、このスタイルで授業を行うことで教員のスキルアップにもつながっている。 【課題】 ・生徒一人ひとりの理解の状況やつまづきの実態を的確に把握し、個に応じたきめ細やかな関わりや助言を一層充実させていく。	・課題に書かれていることが少人数指導のねらいである。この課題に向けた指導方法を考え、実践する。 ・少人数教育で生徒の学力向上に効果を上げておられる。現状としてはTTによる授業が中心のようだが、その活用方法にはまだまだ工夫の余地があると思われる。生徒や保護者アンケート等の意見も参考にしながら、より大きな効果を得られるよう、指導法の工夫や改善に努めていただきたい。 ・タブレット端末を活用すれば、様々な形態の指導方法が考えられると思う。先進校の取組等を研究し、他教科への広がりを含め、さらに発展させてほしい。 ・TTによる授業が効果的に行われており、成果も出ているように思われる。授業を拝見し、ペアやグループで話し合ったり、生徒がテーマに沿って自分の考えを発表している様子を見ることができた。話し合うこと、考えを述べることが実践できていると思われる。	・TT体制（少人数教育）が来年度も維持できるのであれば、より一層の指導の個別化と学習の個性化を進めていくことが必要である。 ・少人数教育だからといって、孤立した学びをめざすべきではない。 ・むしろ、協働的な学びを進めていく中で「個別最適な学び」の充実を図っていく。 ・子ども自身が、自立的に学んでいく力を付けていけるよう工夫改善したい。
	学習環境の整備			・GIGAスクール構想実現のため、タブレット端末（iPad）を効果的に活用し、授業における深い学びや、学びの個別最適化をめざす。 ・ICT機器の更なる充実を図り、授業の質の向上をめざすとともに、各教科で必要な備品もできる限り整備できるように予算を有効に活用する。	・津市e-Learningポータルやロイロノート等の活用、及びオンライン授業を実施するための研修を進める。 ・タブレット端末活用に係る教員研修を推進する。 ・タブレット端末やICT機器のメンテナンス等について予算化を図る。	・生徒一人につき1台のi-padを配備し、学習への効果的な活用を進めている。 ・三重大学と津市教育委員会が連携して、双方向のやり取りができる大学のMoodleを活用した「津市e-learningポータル」を立ち上げ、4週間教育実習生による授業内容動画を作成して公開している。 ・各教科で活用できるようにICT機器の充実を図っている。	【成果】 ・GIGAスクール構想により、生徒1人1台タブレットが配備され、学習への効果的な活用を図る環境が整った。 ・Moodle、Google、ロイロノートを活用した学習支援を推進した。 ・教員用の1人1台パソコンの更新を行い、校務の効率化、安定化を図った。 ・美術室の机の天板を取り替え、学習環境を整備した。 【課題】 ・タブレットが配備されたため、今後は各教科および学校生活におけるICT機器の活用を図るとともに、情報モラルの向上が急務である。 ・今後も優先度を精査しながら全ての教科のICT機器の充実を図っていく。 ・タブレット端末活用に係る教員研修を推進する。	・GIGAスクール構想により、一人一台iPadが配備され、学習形態に制限のあるコロナ禍において、活用の場面がたくさんあったと思われる。 ・GIGAスクール構想による端末の配備が完了したことで、今までとは違った学習環境が整ったことは評価できる。授業でも端末等を活用した風景が確認できている。授業での端末の活用方法等は教員個々のスキルとも関連する要素があると思われるので、個人差が出ないように情報の共有等全体のレベルアップを継続していく体制が必要と思われる。ハード・ソフトのバージョンアップ、メンテナンス対策も不可欠であり対策を講じて必要があると思われる。 ・当面の課題としては、生徒への情報モラル教育の徹底と、更なる活用を進めるための教員研修にあると思う。 ・最新技術を学習環境整備に積極的に取り入れていくことは好ましいことであるが、教員がそれらを使いこなせるのが懸念される。過重負担にならないように配慮しつつ、教員のスキルアップを図ってほしい。	・学校としての、めざす生徒の活用の姿の共有の徹底 ・職員研修等による職員全体のICTスキルの向上 ・各教科・各活動におけるICTのより効果的な活用の実践 ・生徒および教員双方にとっての円滑快適なICT環境の整備 ・生徒のモラル向上をめざした、日ごろからの取り組みの継続

令和３年度 三重大学教育学部附属中学校 学校関係者評価

	本年度の活動	具体的な手立て	達成状況(中間報告)	成果と課題	学校関係者評価	今後の改善点
教育実習	・教育実習を円滑に実施するために、大学との連携を一層深める。 ・実習生の指導を通して、教師自身の指導力向上に努め、生徒理解力を高める。 ・教職大学院生の実習を積極的に受け入れ、充実させる。	・本年度は、6月2週間(8日間)及び9月に4週間(15日間)の実習を行う。事前指導は、リモートで丁寧によりとりをして実習開始までの指導を計画的に行う。 ・教育実習の期間を研究の一環として位置づけ、実習生の教科指導を通して教師自身の授業を振り返り、実習生の授業参観を通して生徒を多面的に観察する。 ・教職大学院生の学修テーマと関連させながら、実習に取り組ませる。	・2週間教育実習、4週間教育実習ともにメールやzoom等のオンラインでの事前指導を行った。実習困難な学生への対応についても大学と連携しながら最後まで取り組ませることができた。 ・4週間教育実習は緊急事態宣言下での実施となり、前半はオンラインのみ、後半は対面及びオンラインでの実習を実施し、オンライン教育実習が実現できた。 ・11月17日までに6名の教職大学院生を受け入れ、大学院生の要望を聞きながら、授業公開やインタビュー、個別指導など積極的に協力している。	【成果】 ・9月から10月初めに2週間と4週間の実習を期間を短縮して、メールやオンラインを活用しながら110名をこえる実習生が最後まで実習を行うことができた。 ・8名の教職大学院生が附属実習を行い、それぞれの学修テーマの深化とともに、校種の違いを通した学びを進めることができた。 【課題】 ・来年度も今年と同じ状況が予想されるため、事前に大学との連携を十分に図っていく。	・教育実習は、学生から教員になるための大事な課程であり、コロナ禍であっても工夫しながら実施されていることは高く評価できる。学校、生徒、大学、学生それぞれの課題やニーズも踏まえて、時代・社会に即した形で実施できるようにしていくことが望まれる。 ・コロナ禍での教育実習の実施は厳しいものがあると推察しますが、その中で実習の効果が得られるように工夫を凝らしていることはすばらしいと思う。大学との連携を十分にとりながら、後進の育成に努めてほしい。 ・コロナ禍の影響により、実習期間の短縮等、これまでとは異なる対応を迫られ、大変だったと思う。そのような中、110名超えの学部生、8名の教職大学院生を受け入れ、全員が実習を終えられたことは評価できる。一方、実習困難な学生の対応については、中学校に混乱が生じないよう、大学と十分に連携することをお願いしたい。	・コロナの中で急な変更対応を行うケースが多々出てくることが予想されるため、さらに大学側と連絡を密にする。 ・教員、実習生ともに負担軽減を図るため、事前指導や実習日誌提出、指導案提出等、引き続きICT化を進める。
キャリア教育	・キャリアパスポートを活用して汎用的能力を高める。(全学年) ・教育相談、進路相談の実施(全学年) ・進路適性検査による生徒自己理解、職業調べの交流を通じての様々な職業機会の学びをふまえた、自己の将来について考える機会の設定(1年) ・働くことの大切さについての学び(1年) ・職業調べ、SDGsに関わる体験学習等の実施(1年) ・防災に関わる講演会等の実施(2年) ・命を大切にする授業、幼稚園訪問の実施(3年) ・進路希望調査の実施、オープンスクール等への参加、進路説明会の実施(3年) ・学部と附属学校教員との連携授業の活用(全学年)	・キャリアパスポートへの記入について、年度や学期の節目でのめあての設定・確認、自らの取組の振り返りを中心に指導・支援していく。 ・道徳、特別活動、総合的な学習の時間において計画的・系統的に行い、充実を図る。 ・教育相談、進路相談、進路説明会は、学校行事として実施する。防災講演会等は、外部講師を招いて実施。命を大切にする授業は、大学と連携して救急救命講習を実施する。幼稚園訪問は、技術・家庭科(家庭)の授業の一環として実施する。進路希望調査、オープンスクール等への参加は、3年進路指導として実施する。	・全学年でキャリアパスポートを作成し、過去の自分を振り返り、自身の成長や変容がわかるようにして、将来に生き方を考える手立てとしている。 ・年度当初に学校行事、教科、道徳、総合的な学習、特別活動の時間数を調整し、バランス良く実施できるように計画している。 ・家庭科の授業と連携した幼稚園訪問(1学期および2学期ともに実施済)や附属病院救急センターと連携した「命の学習」は、状況を見ながら実施に向けて検討している。 ・3年において、オンラインを結んで平和学習を実施した。また、被爆者で平和活動をされている講師の方の生き方に触れることができた。 ・1、2年については、3学期に実施する計画を検討している。	【成果】 ・全学年のキャリアパスポートの取組は、年度当初の計画通りに実施できた。 ・修学旅行や社会見学は、計画通りに実施できなかったが、何とか実施可能な方法を模索して、コロナ禍の状況の中でできる形に工夫して実施した。 【課題】 ・キャリアパスポートを生徒の成長に活用していくために、取り組みやすさを含めて、より効果的な内容にしていくことも必要である。 ・修学旅行や社会見学、福祉体験等の体験学習や大学と連携した取組が、計画通りに実施できなかった。来年度も同様の状況が予想されるので、状況に応じて工夫改善を加えて実施できる方法を模索していく。	・キャリア教育は、教室だけでは学べないこと、生活していく上で必要なことを学ぶことができ、人間形成の上でも重要なことであるので、現状に満足することなく充実させていきたい。コロナ禍の中で、できることが限られると思うが、できることを見極めて実践していただきたい。 ・キャリアパスポートの取り組みを継続実施し、より良い活動となるよう、内容についても工夫や改善を重ねていただきたい。 ・校外学習については、コロナ禍にあり、計画通りにできなかったことは仕方ないと思われる。しかし、生徒にとっては大切な体験であるため、状況に応じて無理のない企画や実施をお願いしたい。 ・個々の生徒の中で、キャリアパスポートを作成することを目的化せず、常にPDCAの意識をもって臨むことが肝要であると考える。 ・T Vで昨年は古閑裕而、今年は渋沢栄一が放映されている。このような先人の生き方を学ばせることもよいのではないかと。	・生徒にとっても、引き継ぐ高等学校等にとっても、意味のある魅力的なキャリアパスポートに改善していく必要がある。今年度であれば進路学習やS T E Pで取り組んだシート等を含めることもよいのではないかと。 ・コロナ禍にあって、校外学習に制限がある中、本校が大切にしてきた修学旅行における平和学習、社会見学における震災学習・企業訪問等の学びをどのように効果的に実践していくのか整理する必要がある。イレギュラーなことが多かったここ数年であるが、見通しを持ち、計画的に学習を進めていけるようにしていかなくてはいけない。
生徒指導	・『つながりあう個』の理念を大切にし、一人ひとりを大切にし、しっかりと育てる。 ・いじめの未然防止と早期発見に努める。 ・生徒指導部を中心に、全校での指導体制づくりと情報共有を行う。 ・部活動、交通安全指導、防災教育について生徒指導部会が中心となって取り組む。 ・生徒会と連携して「あいさつ＋ひと言運動」に取り組む。	・学び合う仲間が育ち、活気ある学級・学年づくりを進めるために、学級での係活動や班活動の充実を図り、一人ひとりが活躍できる場を設定する。 ・附属学校園いじめ防止基本方針及びいじめ防止対策年間計画について共通理解を図る。情報リテラシー、ネットモラルの指導を充実させる。 ・生徒指導部会を週1回開催し、情報共有・共通理解を図り、統一した指導を進める。 ・部活動ガイドラインに基づいた部活動指導、年間を通した交通安全指導、防災教育の取組を全校的に統一して進める。 ・あいさつ運動は、生徒会とタイアップして取り組む。また、教師から率先してあいさつを行い、ひとつつけ加えることを意識する。	・いじめの早期発見に向けて、定期的ないじめ調査を実施し、いじめが認められた場合は、適切に解決を図り、その後の経過を見守っている。 ・情報共有・共通理解を図り、組織的な対応を推進している。 ・5月に本校単独の避難訓練を実施した。 ・一斉下校時の交通指導の取組を継続して取り組んでいる。 ・あいさつは、教員自らが全ての生徒に積極的にあいさつしていくことを確認して取り組んでいる。 ・各学年、各学級で工夫をしながら集団の育成を図っている。	【成果】 ・附属学校園共通の「いじめ防止基本方針」、「いじめ防止対策年間計画」を作成し、いじめの未然防止、早期発見、早期対応に的確に取り組むよう教員の意識を向上を図った。 ・時間割の中に週1回設定された生徒指導部会で、いじめをはじめとした情報共有が図られている。 ・生徒指導部を中心に一貫した指導体制と情報共有は図られている。今後も学年の枠を越えた情報共有や指導が一層図れるような全校指導体制を目指す。 【課題】 ・あいさつについては、まだ十分とは言えないので継続して取り組んでいく。	・あいさつ運動やいじめ防止は言うまでもなく大切なことであるが、そうした取り組みはこの学校でも行われていると思われる。附属中学校としては、個々の能力や特性を活かすことに力点を置いていた指導にも取り組んでみてはどうか。 ・「あいさつ」等は地域や家庭と連携を図っていく必要がある。 ・あいさつはコミュニケーションの基本であり、人に言われてするのではなく自然とできるように、生徒の気づきが得られる取り組みも必要と思われる。 ・いじめの未然防止、早期認知の取り組みがうまくいっていると思われる。ただ、全国的には生徒同士でのトラブル、事件も多発しており、生徒の内面的などころでの影響も心配される。これらの取り組みには、ゴールや正解はないと思われるので、取り組み内容のレベルアップを心がけていただきたい。 ・いじめはどこの学校でも起こり得るという意識を全教職員が持ち、いじめの「未然防止・早期発見・早期対応」に引き続き努めていただきたい。 ・生徒指導部会で各学年間の情報共有と共通理解がなされているが、それを全教職員にどう徹底させるかが大切かと思う。	・生徒指導部会や職員会議等学年を越えた迅速な情報共有とともに、適切な指導が行えるよう全校での指導体制を今後も継続していく。 ・あいさつについては、生徒会とタイアップして取り組むとともに、教師自ら率先してあいさつをすることにより、生徒に気づかせていく。 ・交通マナーの改善に努め、交通事故や登下校時のトラブルを未然に防ぐ。 ・ネットモラルやネット依存に目を向け、ネットトラブルについての研修やを行い、生徒のネットトラブル防止に務める。 ・校則の見直しについては、生徒会とタイアップしながら、現状に見合った改善を、全職員で検討を進めていく。 ・制服については、個人の自由が尊重されるジェンダーレスのものの採用に向けて検討していく。
道徳教育	・各学年ごとに年間指導計画を作成をし、指導方法を工夫し、考える道徳、話し合う道徳についての実践を重ねる。特に、命を大切にする教育を推進する。 ・道徳教育推進教師を中心に、昨年度に引き続き学校全体で適切な評価のあり方について研究する。	・道徳科との関連を意識しながら、各教科における道徳教育のねらいを明確にする。 ・各学年で道徳の授業案の作成を積極的に行い、定期的に学年相互の授業参観を行う。事後検討会により指導の改善を図る。 ・研修会への参加や先進校への視察により、道徳教育の研修を深める。	・道徳の指導案を各学年で検討し、指導方法の工夫を図り、「考え、議論する」道徳を推進している。 ・今後は授業研究と検討会を実施して、成果と課題について明らかにするとともに、評価についてもさらに検討を重ねていく。	【成果】 ・道徳の指導案を学年会で検討し、「考え、議論する道徳」を実施した。生徒はペアワーク、グループワーク、全体交流等を通して、自己を見つめたり、物事を広い視野から多面的・多角的に考えたり、人間としての生き方について考えを深めたりすることができた。 【課題】 ・道徳科に関する評価の基本的な考え方を道徳教育推進部会で作成しているが、より適切な評価のあり方について今後も検討していく。	・「考え、議論する道徳の授業」を通して、他者の意見を認め、自己の生き方について考えを深めていけるよう期待している。 ・コロナ禍の影響もあり、社会全体が閉塞的な考えが横行しており、差別や偏向的な考えが多く、自分の意見だけを主張するようなケースも多くなっていると思われる。ペアワーク、グループワーク等も含め、生活の中で、他人の意見に耳を傾け、人と対話することの重要性を今後も身につけるようサポートしていただきたい。 ・道徳の評価は難しいものと思う。道徳科という授業の中だけでなく、日々の態度や行動も評価対象になるものと考えるので、適切な評価のあり方について今後も検討してほしい。	・特別の教科「道徳」の指導と評価について、今後も情報を求め、より適切な評価のあり方について研究を深める。

令和３年度 三重大学教育学部附属中学校 学校関係者評価

	本年度の活動	具体的な手立て	達成状況(中間報告)	成果と課題	学校関係者評価	今後の改善点
特別支援教育	・生徒一人ひとりの実態を踏まえ、本人・保護者の思いやニーズを把握しながら、長期的な視点に立って、適切な対応を図る。	・特別支援学校と運動会や文化祭などの学校行事を通して生徒同士の交流を行う。 ・特別支援部会を週１回開催し、ＳＣとの情報共有を図る。また、ＳＣと学年集団との情報共有の場を学期に１回設定する。 ・特別な支援が必要な生徒について、個別の支援計画を作成する。 ・適宜ケース会議を実施する。	・１１月に１年でZoomによる特別支援学校との交流を図った。 ・部会の定期開催、ＳＣとの情報共有は昨年同様に実施している。 ・個別の支援計画については、保護者の同意を得ることを念頭に、作成に向けて検討を重ねている。 ・ケース会議が必要な場合があれば、今後も継続的に開催していく。 ・今年度、特別支援教育支援員に入っていたが、不登校生徒が登校した際の対応をしていただいている。担任と連携を図りながら、生徒が登校するきっかけ作りを行うことができた。	【成果】 ・特別支援部会の中では、情報共有を図りながら支援を必要とする生徒の一部を外部の関係機関につなぐことができた。 【課題】 ・学校全体で困り感をもった生徒や支援を必要とする生徒の情報共有や支援体制づくりは、まだ不十分である。 ・個別の指導計画、支援計画について、四附属校園で共通の書式を作成することができ、今後は保護者との連携をどう図るかが課題である。	・学級や学年における困り感を持つ生徒や支援を必要とする生徒への具体的な支援を明確にし、教員の共通理解のもと、実践されることに期待したい。 ・個別の指導計画、支援計画について一歩前進したことを評価する。生徒個々の特性を踏まえた指導を今後も続けてほしい。 ・コロナ禍の影響により行事等における直接的な交流は難しくなったと思うが、交流を絶やさないよう工夫し、継続して行っていただきたい。 ・特別支援学校との交流の場があることで、生徒自身が感じるところ、考えるところがあると思われるので、今後も無理のない範囲で続けていただきたい。支援を要する生徒の対応については、教員個人としてではなく組織として対応できる体制が必要と思われる。 ・「特別支援を必要とする生徒」の周りにいる全校生徒の理解が必要である。人権教育全てに言えることである。	・四附属共通で個別的教育支援計画を作成するきっかけはできたが、今後はそれをいかにもうまく活用していくかに焦点を当てていく必要がある。計画を作成するだけではなく、その意義を理解し、保護者と連携して支援を行っていくきっかけをつくりたい。そのためには、生徒や保護者が困り感を持ったときに、保護者と教員が連携していくチャンスと捉え、スクールカウンセラーや特別支援部会とも連携を図り、支援を行っていく体制をつくっていく。 ・学校行事を通しての附属特別支援学校と１年生の交流をZoomを使用してオンライン上で行うことができた。来年度以降も、引き続き１年生と附属特別支援学校との交流を継続していく。
国際理解教育	・教科や各学年、生徒会執行部や国際福祉活動部を通して、津ユネスコ協会への活動参加やESD教育に取り組む。	・津ユネスコ協会の行事に積極的に参加し、使用済み切手やはがきを回収する取組を進める。 ・各学年による平和学習，防災学習，福祉体験学習の成果を，宣言や俳句，個人新聞等で発信する取組を進める。 ・SDGsを取り上げた学習を通して，海外の学校との交流を計画する。	・本次研究の中核としてSDGｓを教育活動に取り入れている。１１月に２・３年でクアラルンプール日本人学校との交流会をZoomで実施した。 ・各学年による平和学習や防災学習の取組について生徒が，平和宣言や個人新聞等で発信している。	【成果】 ・各学年の英語科においてAＬＴとのチームティーチングや三重大学の留学生と英語でメールのやり取りをする機会（１年英語）を持つなど，英語を使用する必要感を持たせる場を設定できた。 ・SDGｓをツールにして地球規模の問題に目を向けることができた。 【課題】 ・海外の学校との交流を持てるようにしたい。	・SDGｓに関する考えが，壁新聞や様々な掲示物を拝見して机上の知識だけでなく，自分たちの生活の中に落とし込んでおり，生徒たちが本質を理解されていることがうかがえ，評価できる。これからの時代を生きていくためには国際化，海外との交流は重要であり，交流の場を設け生徒の経験値を高めていただきたい。 ・SDGｓの考え方に立って国際理解を進めていくことは重要であると考える。なお，昨年度と同じ課題が挙げられているが，海外の学校との交流の場を設けるための手続きは，そんなに煩雑であるのか。三重大学等の協力を得ながら，積極的に取り組んでほしい。 ・コロナ禍という状況であるからこそ，海外の学校とインターネット等での交流を進め，国際理解の機会を増やして行けるとよい。 ・平和学習や防災学習のまとめとして，平和宣言や個人新聞で発信できたことは，個々の中に学べた成果である。	・活動部や部活動などの教育活動の随所にSDGｓの要素を取り入れながら，大学や企業，海外の学校との交流を計画していく。 ・STEPのグループ研究と活動部での活動がつながっているため，より実践的で具体的な取り組みを実施できるようにしたい。
教育相談	・学校生活における生徒の悩みや思いを把握して生徒理解に努める。 ・不登校生徒の困り感の把握に努め，不登校生徒への対応を学校全体で進める。 ・教育支援センター等の外部相談機関との連携を進め，不登校生徒の学習機会を確保していく。	・全校生徒を対象とした計画的な教育相談と，困り感のある生徒に寄り添ったタイムリーな教育相談を行う。 ・ＳＣ，養護教諭，附属学校園特別支援教育支援員と連携しながら，不登校生徒の困り感の把握に努め，継続的な教育相談を行う。	・各学年とＳＣ，養護教諭との連携は，今年度も密に行っている。 ・ライフの指導や学期ごとの教育相談では，コロナ禍で不安や心配を抱えた生徒一人ひとりに寄り添い，悩みや困り感の把握に努めている。	【成果】 ・不登校生徒の中で教育支援センターへ通級することをきっかけに，学校へチャレンジ登校する生徒が見られた。 ・ライフ（日々の生活ノート）の指導や教育相談の中から生徒個々の悩みやいじめ，問題行動等を把握して指導につなげることができた。 【課題】 ・教育相談部会の中だけでなく全体への情報共有，連携を一層進め，生徒一人ひとりに寄り添ったきめ細やかな対応を図るための支援体制の充実を図る。	・関係機関との連携にも期待したい。 ・すべての教員がカウンセリングマインドをもって生徒と接することと，教職員間の情報共有・連携が大切であるが，そのための体制づくりはできていると思われる。 ・「先生に悩み等を気軽に相談できる」アンケート結果より，雰囲気づくりや信頼関係づくりには生徒と接する時間的余裕の確保が必要である。 ・年々増加傾向にあると言われている不登校生徒へのサポートは，個々によってアプローチの仕方が異なり大変であるが，根気強く繋がる取り組みの継続をお願いしたい。 ・不登校の生徒など，画一的なサポートではなく，生徒個々の状況に合わせたサポートを行っていると思われる。今後も情報共有，連携を高め組織としての体制づくりに努め，充実されたサポートを継続していただきたい。	・全校生徒を対象とした計画的な教育相談及び生徒一人ひとりに寄り添ったタイムリーな教育相談を今後も継続する。 ・生徒指導部会・特別支援部会の両方にまたがるため，どちらかの分掌を兼ねることで連携がスムーズになると考える。
生徒会	・生徒一人ひとりが自ら学校生活について考え，見直し，改善するために，生徒の自治を大切にした生徒会運営を進める。 ・生徒が主体となる生徒会行事の企画・運営を行う。 ・あいさつ運動等の日常活動を充実する。 ・ユネスコや赤十字の活動へ積極的に参加する。	・学級会 → 生徒議会 → (拡大生徒議会) → 学級という流れを定着させて，取組を進めていく。 ・生徒会だよりの発行による情報発信を行う。 ・意見箱によって生徒の自由な意見に耳を傾ける活動を継続する。	・附中のハーモニーは中止としたが，文化祭と体育祭は規模を縮小し，生徒会執行部を中心に工夫しながら実施した。 ・生徒議会や活動部会を定期的に行っており，withコロナの学校生活について見直し，改善する手立てを今後も考えていく。 ・あいさつ運動，清掃活動等の校内の日常活動には，熱心に取り組んでいる。 ・今後，赤十字やユニセフ主宰の研修会へ参加していく。	【成果】 ・体育祭は，規模を縮小し，時間も短縮して生徒会を中心に実施できた。 ・生徒議会や一斉活動部会を行い，withコロナの学校生活について見直しを図ることができた。 【課題】 ・来年度に向けて，今後の状況を考慮しながら行事の企画や運営について見直し，活動の充実を図っていく必要がある。 ・赤十字やユニセフの活動へは今後も積極的に取り組んでいく。	・コロナ禍により大きな制約を受ける中で，生徒会活動を一定程度行えたことは良かったと思う。なお，意見箱をより活用するための工夫を望む。 ・コロナ禍により，生徒会活動にも影響があったかと思いますが，withコロナの学校生活についての見直しや工夫した体育祭を実施できたことは，自信に繋がったと思う。 ・実態がよくわからないが，生徒会の自主性も高めてより良い活動ができるようにサポートしていただきたい。 ・次年度もコロナ禍における活動を工夫しながらの実践に期待している。	・体育祭や文化祭等の学校行事や，年間を通したあいさつ運動の在り方について，生徒の主体性を引き出し検討しながら取り組みを継続する。 ・生徒が主体となって行事の内容の検討等を行うことができたが，本来行うべき生徒の日常生活をよりよくするための取り組みに時間を割くことができなかった。生徒会が関わるべき部分とそうでない部分を明確にすることが必要である。 ・心声箱のデジタル化など，活用するための工夫を検討する。

令和3年度 三重大学教育学部附属中学校 学校関係者評価

	本年度の活動	具体的な手立て	達成状況(中間報告)	成果と課題	学校関係者評価	今後の改善点
教育環境 づくり	・校内美化と施設設備の安全管理に努め、教育環境を整える。 ・働き方改革に積極的に取り組む。 ・風通しの良い学校文化を醸成する。	・日常の清掃活動を充実させるとともに、年2回のクリーン大作戦（除草作業）を保護者、生徒とともにに行い、環境整備に努める。 ・防災の視点から施設設備の改善と危機管理マニュアルの見直しを行う。また、保護者（育友会防災管理部）とともに、防災備蓄品の整備を進める。 ・保護者（育友会図書部）の協力のもと、学校図書館の整備充実を図る。 ・時間外労働時間確認シートを活用し、総勤務時間の縮減に努める。 ・校務のデジタル化を進め、業務改善を進める。 ・報告・連絡・相談を徹底をし、職員間の意思疎通を図る。	・例年実施しているクリーン大作戦は、今年度も実施できなかったが、業者に依頼して体育館や球技場の斜面の除草を1回行っている。 ・働き方改革の具体的な方策の1つとして、部活動の活動日や活動時間の適正化による勤務時間の縮減に努めている。（平日2日、土日1日の休養日設定） ・速やかな報告・連絡・相談を徹底し、職員間の意思疎通を図っている。	【成果】 ・施設設備等の改善を大学に要望し、エントランス部分の修繕工事が施工された。 ・第1体育館、武道場の照明LED化工事が施工された。 【課題】 ・コロナ禍の対応として、様々な物品購入を要望していく。 ・教職員の健康を守り、ゆとりをもって生徒に接していくための働き方改革に、より一層取り組んでいく必要がある。	・コロナ禍で学校の業務も激変し先生方も大変だと思われる。ハード・ソフト（施設整備ややり方）の改善等により、手間ひま・コストがかかるものが増えていると思われるが、創意工夫、新たな技術・製品等の導入などにより削減できるものがあれば積極的に導入されたい。 ・今後も計画的に教育環境の整備を進めていくことが大切である。教員の心身の健康保持にも引き続き努めていただきたい。 ・校務のデジタル化や部活動の活動時間の適正化等、教員の働き方改革に取り組みれ、少しずつ成果を上げているものの、仕事の絶対量が多く、課題は大きい。 ・生徒や教職員の学校生活が安全・安心・快適となるよう、大学へ要望を計画的にしていだきたい。 ・働き方改革について、この評価を見ても多岐に渡って取り組まれている。取り組まれていることを精選、軽重をつけること、集約することが必要なのではないか。 ・働き方改革については、社会的にも求められているので、個々の意識改革、組織としての制度改革など多面的な視点で取り組み、一つずつ成果を上げていく必要がある。	・引き続き、生徒の安全が確保され、よりよい学習環境に向けて施設設備等の改善充実を継続して進めていく。 ・働き方改革を推進し、時間設定をこまめに行い、教職員の自己意識改革および組織的な改革の努力を継続的に図る。 ・部活動ボランティアの人材確保と積極的な活用を図る上で、具体的な方策を立てていく。 ・引き続き、会議時間の短縮等により、総勤務時間の縮減を図る。
開かれた 学校づくり	・学校評議員会（兼 学校関係者評価委員会）を開催して、学校関係者評価を行い、学校運営の改善を図る。 ・学校通信、学級・学年だより、進路通信、保健だより等の発行による情報発信に努める。 ・HPの更新に努める。	・年3回、学校評議員会を開催し、学校運営に関する意見を集約する。また、PDCAがしっかり機能する学校関係者評価を行う。 ・各種たよりによる情報発信とともに、教育活動に関する学校アンケート等の公表等による情報提供を行う。 ・HPの更新作業が出来る職員を各学年1名以上とする。	・学校評議員会は、計画通り年3回開催する。各評議員の意見を集約し、学校運営に反映できるよう努めている。 ・学級通信、学年だより、学校通信、HPによる情報発信を行っている。また、全生徒、保護者に学校評価に係るアンケートを実施した。その結果を学校経営に生かしていく。 ・育友会と連携したクリーン大作戦や非常食の試食といった活動が中止となったが、防災管理部の防災備蓄庫点検や図書部の活動、編集部「きづな」の発行等の活動へ協力していく。	【成果】 ・学校評議員会を計画通り3回開催し、各評議員から学校運営について意見や助言をいただいている。 ・各種通信やHPによる情報発信を行った。特に、8、9月の緊急事態宣言下に置おける文書、通信、諸連絡をメール配信した。 ・休校期間の課題や諸連絡、本校の入試の情報提供においてHPを活用した。 ・育友会の活動は例年の計画通りにはいかなかったが、防災管理部や図書部、編集部等の活動へ協力できた。 【課題】 ・今年度の状況から学校からの情報発信の方法や育友会の活動をデジタル化、ペーパーレス化していく。	・様々な手立てを通して開かれた学校づくりに取り組んでいると考える。ホームページを充実させるとともに、保護者や卒業生、地域の方々の声に真摯に耳を傾けることを期待する。 ・全生徒や保護者にアンケートが実施されており、今後結果分析等を公表し、学校経営の改革に活かしていただきたい。 ・年3回の学校評議員会や授業参観の他は、コロナ禍により直接生徒の活動に触れる機会がなく、残念であった。 ・HPによる情報発信等にも努めており、今後も継続されたい。生徒、保護者へのアンケートが継続的に実施されており、学年別動向、あるいは時系列での評価ができ、対応策検討の基礎とできるので、今後も継続して実施されたい。職員向けアンケートも実施されており、時系列での評価等がなされている。項目によっては、直ぐには効果が出ないものもある。課題把握⇒対策⇒評価の繰り返しが必要であり、この動きが目に見えることで、改善に向けて行動が続けられると思われる。	・情報発信について、デジタル化への取組を今後も引き続き継続していく。 ・生徒、保護者アンケート結果を職員内で十分精査し、今後の学校改革として具現化して取り組む。 ・コロナ禍ではあるが、授業参観の機会を学期に1回設定できるよう、時期を探りながら設定する。 ・日頃の様子をこまめに紹介できるよう、ホームページの充実にも今後も取り組む。